平成 29 年度　琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展
石垣市制施行 70 周年記念企画展

琉球大学資料にみる

八重山の自然とくらし

琉球大学理学部動物生態学研究室撮影

琉球大学資料にみる
八重山の自然とくらし

赤嶺　守（法文学部教授）

琉球大学附属図書館は毎年、「大学公開」の一環として県内の公共図書館と連携して「学外貴重資料展」をおこなってきた。平成26年度から琉球大学博物館（風樹館）との合同企画展を久米島・宮古島・奄美大島で開催し、今年度は石垣市制施行70周年も記念して石垣市立図書館で開催されることとなった。八重山では平成23(2011）年に一度行っており、今回は二回目の企画展である。

石垣市大川には、1819年に建造された赤瓦葺きの「宮良殿内（みやらどぅんち･めーらどぅぬず)」と呼ばれる、王国時代に代々八重山の頭（かしら）職を務めた宮良家の屋敷があり、現在、琉球様式の庭園をもつ宮良殿内は国の重要文化財に指定されている。宮良殿内には、王国時代の古文書が多く伝わっている。当時の当主宮良當智氏の、広く研究に役立ててもらいたいとの意向により、そうした古文書は「宮良殿内文庫」として、昭和37(1962) 年に琉球大学附属図書館に寄贈された。「宮良殿内文庫」は、現在、伊波普猷文庫、仲原善忠文庫、島袋源七文庫と並び、沖縄学研究に欠かせない資料となっている。

今回の企画展では、そうした「宮良殿内文庫」の中から、首里王府の八重山統治上の重要な役所である蔵元（くらもと）の諸事規定書、職歴や功績の記録、日用品購入の記録、家庭祭祀の際の献立構成、妊娠・流産・出産の届け書、宮古・八重山上布等の軽減陳情書、宮良當宗が宮良間切の頭として各村の正男に賦課した魚・野菜・薪・炭の台帳、鳩間村上納田の配分史料、大和芸能の笛・小鼓・大鼓と太鼓の楽譜、宋代の儒学者朱子が編纂した、人として守るべき道徳的秩序や人間の倫理を説いた修身の書などが展示される。こうした史料を通して、王府の八重山支配や八重山における行政の実態を知ることができる。と同時に、王国時代の八重山士族の暮らしや文化・教養もうかがうことができる。

博物館（風樹館）には琉球列島で収集した17万点あまりの標本や資料が収蔵されている。今回は博物館（風樹館）からイリオモテヤマネコの毛皮標本や、八重山の絶滅危惧1A類にランクされている昆虫の貴重な標本、貢納布の藁算（わらざん）、人員検査の藁算（わらざん）等を出展し、石垣市立八重山博物館所蔵のジュゴンの燻製も展示される。是非会場に足を運び、八重山の歴史・文化・自然を実感していただきたい。また、琉球大学附属図書館のホームページでは「宮良殿内文庫」をデジタル化して公開している。この機会を利用して併せてアクセスし閲覧していただきたい。

凡例

1．本書は、平成29年12月5日(火)～12月17日(日)まで石垣市立図書館にて開催される
　平成29年度琉球大学附属図書館・琉球大学博物館(風樹館)企画展／石垣市制施行70周年記念企画展
　「琉球大学資料にみる八重山の自然とくらし」の展示資料解説（パンフレット）である。
2．展示資料には図版に掲載していないものがある。
3．本書の編集は、琉球大学附属図書館が担当した。

クイズラリーのこたえ：1-②、2-③、3-①、4-②、5-③、6-③

1．自然

イリオモテヤマネコの発見

琉球大学博物館（風樹館）には、沖縄県内に生息するヤンバルクイナやヤンバルテナガコガネなどの貴重な生物標本が多数収蔵されている。その中でも、20 世紀最大の生物学的発見と言われたイリオモテヤマネコは、当館の生物コレクションを代表する標本の一つである。

イリオモテヤマネコが新種として学会に発表されたのは、沖縄がまだ日本に復帰する以前の 1967 年のことである。本種の発見は、元琉球大学学長で当館の初代館長でもある高良鉄夫博士の尽力によるところが大きく、そのため当館にはイリオモテヤマネコに関する標本が多数保管されている。今回の企画展で紹介する一連の標本類は、イリオモテヤマネコが新種として発表されるまでの過程を物語る歴史的に重要な標本である。

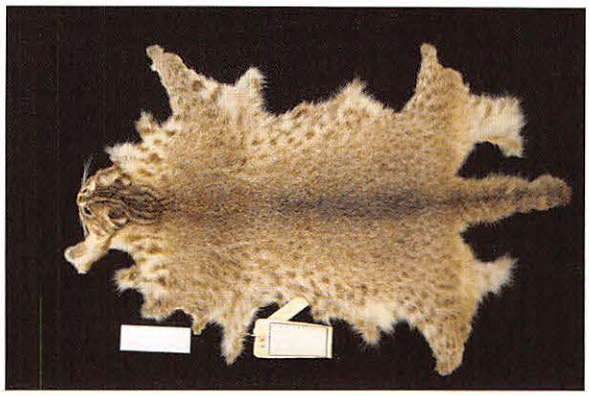


写真１．新種発見のきっかけとなった毛皮標本
西表島網取でイノシシ罠にかかって死んだ成獣の毛皮。イリオモテヤマネコの成獣が研究者の目に触れた最初の標本（パラタイプ標本）。

1961 年 4 月、日琉合同の農業調査団の一員として有害動物調査のために西表島に渡った高良氏は、現地の案内人から地元で「ヤママヤー」（マヤーとは沖縄の方言でネコの意味）と呼ばれているヤマネコがいるとの情報を得た。当時、西表島では希にヤマネコが捕獲されると食用に供されていたが、標本となる骨などは残されていなかった。当初は、飼い猫が野生化したものではないかと考えたが、猟師らの話からその猫が飼い猫と異なる特徴を持つことが分かり、地元の方たちにヤマネコの捕獲を依頼した。1962 年 5 月、高良氏のもとに、樹木の伐採中に樹洞で発見された 2 頭の子ネコの標本が送られてきた。残念ながら、親ネコは発見時に逃亡したため、捕獲されたのは樹洞内に残されていた生後間もない幼獣であった。これが、世界で最初に研究者の目に触れたイリオモテヤマネコの標本となった。翌年の 1963 年 4 月には、網取小中学校教諭の親富祖善繁氏からミイラ化した幼獣の死体が届いたが、原形を留めないほどに押し潰されており研究に利用できる状態ではなかった。しかし、これら一連の標本により、高良氏は未知のヤマネコが存在するとの確信を得た。その 2 年後の 1965 年 2 月、ついにイノシシ罠に掛かって死んだ成獣の毛皮が再び親富祖教諭から高良氏のもとに届いた（写真 1）。この毛皮は、イエネコに比べて大きく、耳の先端が丸く背面に白斑があるなどの特徴からヤマネコであることが明らかとなり、地元の新聞に「西表ヤマネコ」と言う名で初めて報道された（写真 2）。現地で毛皮を処理した親富祖氏によると、包丁の切れが悪く暗い中で作業をしたのできれいに毛皮を剥ぐことができなかったそうである。

西表で怪猫捕える
琉大に毒皮 家猫の二倍の大きさ
琉球新報
1965年2月16日

写真２．イリオモテヤマネコ発見当時の新聞報道
西表島の網取で中学校教員をしていた親富祖善繁氏によって琉球大学に届けられた毛皮標本。

ちょうどその年、取材のために沖縄を訪れていた動物作家の戸川幸夫氏は、高良氏から八重山での取材のついでにヤマネコの情報収集を依頼された。同年 3 月、戸川氏は西表島で入手した別の 1 頭の毛皮と先に送られていた毛皮個体の頭骨を入手して高良氏に持参した。高良氏は、これらの標本をもとにヤマネコの鑑定を国立科学博物館の今泉吉典博士に依頼した。さらに同年 5 月、西表島南風見田の海岸で、大原中学校の生徒らが捕獲した個体が戸川氏によって今泉氏のもとに届けられた。一連の標本をもとに、1967 年にイリオモテヤマネコが新種として日本哺乳類学会誌に掲載された。（佐々木健志）

八重山の絶滅に瀕した昆虫類（絶滅危惧種）

2017 年に 12 年ぶりに改訂された『沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物改訂第 3 版（動物編）』には、全部で 991 種の絶滅に瀕した動物が掲載されている。このうち、八重山諸島に生息する昆虫類で、絶滅の危険性が極めて高い「絶滅危惧 1A 類」にランクされている昆虫が 7 種ある（写真 3）。なかでも、県内で最も絶滅が心配されている昆虫の一つが、石垣島の米原周辺だけに生息するイシガキニイニイである。日本でいちばん生息範囲が狭く個体数の少ないセミで、近年では多くても年に数個体しか確認できない。琉球大学博物館では、環境省とともに 10 年以上にわたってイシガキニイニイの保全研究を行っており、本種の新種記載に用いられたパラタイプ標本（写真 4）や発見当初に採集された貴重な標本類を保存している。

（佐々木健志）

写真 3．八重山の絶滅危惧 1A 類の昆虫
八重山諸島に生息する、最も絶滅が心配されている昆虫類。なかには、フチトリゲンゴロウやタイワンタガメのように 10 年以上も発見されておらず、絶滅した可能性の高い昆虫もいる。

写真 4．イシガキニイニイのパラタイプ標本
石垣島の米原にあるヤエヤマヤシ林の周辺だけに生息する、石垣島の固有種である。野外での詳しい生態は不明であるが、成虫は 6 月～ 7 月にかけて出現し、クワノハエノキなどの高い梢にとまって鳴く。

沖縄のジュゴン

人魚のモデルともいわれる海棲哺乳類で、沿岸の浅い海に生息し、砂地に生えるベニアマモやリュウキュウスガモなどの海草を食べる。成体は、体長 2.5m 前後、体重 250 ～ 400kg になり、寿命は約 70 年である。メスは 10 歳前後で成熟し、1 産 1 子で、妊娠期間は 12 ～ 14 ヶ月、哺乳期間は 18 ヶ月以上におよび、3 ～ 7 年毎に出産する。近年、沿岸部の開発や乱獲、漁網による事故死などにより世界各国で個体数が激減している。現在、日本では沖縄島周辺だけに数十頭が生息しているものと推測され、分布の北限域となっている。

琉球大学博物館には、1965 年に宮古群島伊良部島の佐良浜沖で捕獲された雄の剥製・全身骨格と 1987 年に沖縄島佐敷町海岸で採集された雌の頭骨標本（写真 5）が保存されている。（佐々木健志）

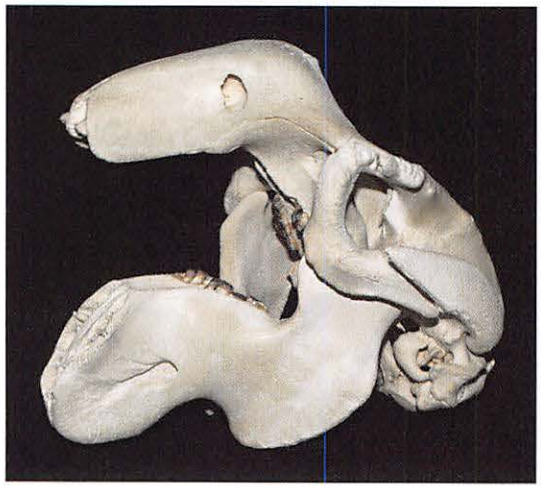


写真 5．ジュゴンの頭骨標本（雌）

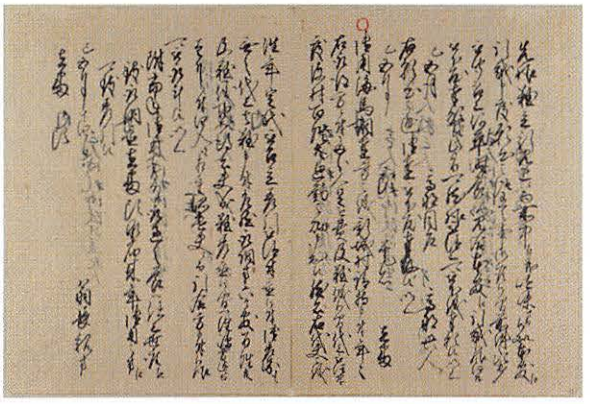
人とジュゴンの関わり

沖縄では、ジュゴンは食用だけでなく、装飾品や祭祀道具などとしても古くから利用されてきた。沖縄島と沖永良部島の縄文時代後期の遺跡からは、ジュゴンの下顎や肩甲骨などで作られたチョウの形をした蝶形骨器が出土しており、また今帰仁城跡（14 世紀）からはジュゴンの骨で作られたサイコロ（写真 6）や弓矢の鏃 (やじり) などが発見されている。

琉球王国時代には八重山諸島の新城島（上地島と下地島）の住民によって専属的にジュゴンが捕獲され、肉が王府に献上されていた。両島の御嶽には、捕獲したジュゴンの頭骨が大切に祀られていた(写真 7)。また、ジュゴンの方言名も各地に多様な名称が残されており、沖縄諸島では主に「ザン」が、宮古諸島では「ヨナタマ」、新城島では「ザヌ」、西表島では「ザノ」などと呼ばれていた。（佐々木健志）

写真 6. ジュゴンの骨でできたサイコロ（今帰仁村歴史文化センター蔵）

写真 7. 下地島の七門（ななぞー）御嶽
下地島でジュゴンの頭骨が祀られていた御嶽。石垣の上にはジュゴンの頭骨の破片が置かれている。



万書付集（よろずかきつけしゅう）　宮良殿内文庫

1860 年 7 月成立。宮良當親による筆写本。1856 年、首里王府から八重山の行政拠点である蔵元へ通知された諸手形と 1857 年八重山へ派遣された翁長親方による通達文書から構成されている。本文書は翁長親方の仕置に関連したものが大半を占めており、翁長親方による仕置策の成立過程を詳細に理解することができる。新城村へ賦課されている御用海馬（王府へ納めるジュゴン）について、海馬の捕獲が難しいことから人夫負担の換算を引き上げてもらいたいとの同村百姓たちからの要請があり、それへの対処策が示されている。この一例以外にも当時の八重山社会の実相を知る上で貴重な文書が多数、記載されている。（琉球大学附属図書館）

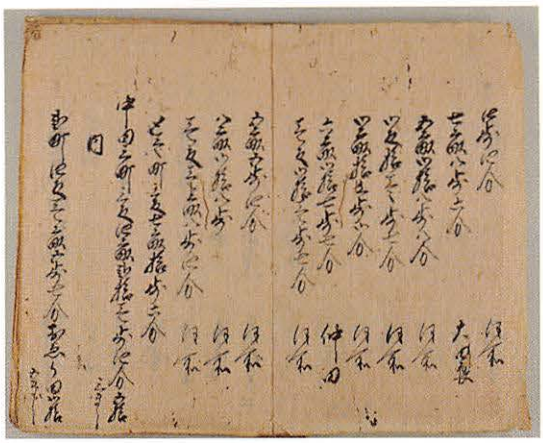
ジュゴンの燻製 (表・裏)

石垣市立八重山博物館蔵

2．くらし・生業

上納田配分に関する書類

宮良殿内文庫



鳩間村、上納田の配分史料である。作成者は鳩間目差、上原目差、鳩間村耕作筆者小渡筑登之、高那村耕作筆者石垣にや、小浜村耕作筆者源河にや、古見村耕作筆者の６人である。資料の冒頭には水損により荒田になった４町１反余が除外され、次いで１町８反余が荒田になっているが来春明け広げるハル名と面積が記されてる。また鳩間与人のおゑか田（役地）として４町余、鳩間目差のおゑか田として９反余の配分する予定のハル名と面積も記されてる。残った９町８反余を男女 73 人に割付、一人あたり 405 坪余が、家の人数に応じて、割付けられている。（里井洋一）

牛馬帳

宮良殿内文庫

1899 年８月、宮良當整が改製した宮良殿内所有の牛馬台帳である。宮良殿内は自ら管理せず、大川、石垣、新川、平得、前里、大浜、白保の百姓に寄託している。また、宮良牧に関わる用務には、宮良殿内の名代として宮良村運天屋真屋が処理している。馬や牛に関しては 1885 年から、ほぼ出生順に名簿が作られ、母馬母牛および管理者の変更、売買、生死等が記されている。寄託者への管理に関しては、當整の弟當表（當宗二男）當訓（當宗三男）當長（當宗四男）、長男當明等、家族で行っている。（里井洋一）

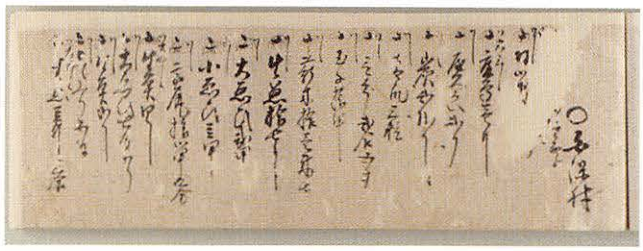
宮良間切頭の正男への野菜・薪等の賦課台帳

宮良殿内文庫

宮良當宗が宮良間切の頭（1872 ～ 97 年）として賦課した魚、野菜、薪、炭の台帳である。賦課されたのは宮良間切、11 村の正男（15 ～ 50 歳の男子）368 人である。歳暮という名目で賦課した総額は魚が 30 斤、野菜 40 斤、薪４束、炭 30 斤である。歳暮以外の時期で、歳暮の半分の量が賦課されているがどういう名目かの記載はない。ただし、その半額賦課の内、炭だけが賦課されていない村が８つある。文末に巳７月と記され、當宗頭在任中の 1881 年もしくは 1893 年、巳年のものと推察できる。（里井洋一）

白保村外各村への割当表

宮良殿内文庫



宮良當宗が宮良間切の頭（1872～97年）在任時に、宮良間切各村および個人が當宗に納入した物品の記録である。年代は不明であるが、12月末の歳暮時期の日付のものが多い。納入された品目は卵76甲、生魚約73斤、薪約61斤、炭57斤、夕顔（つぶる）約47斤、高尻33甲で、それ以外の23品目は海産物、野菜等の食料品が多い。宮良間切の内、人口の少ない盛山・桃里・伊原間三村からの納入記録はない。資料の欠落なのか、実際に納入がないのかはわからない。ほとんどは村の名前での納入だが、宮良村に関しては個人名での納入が7件ある。(里井洋一)

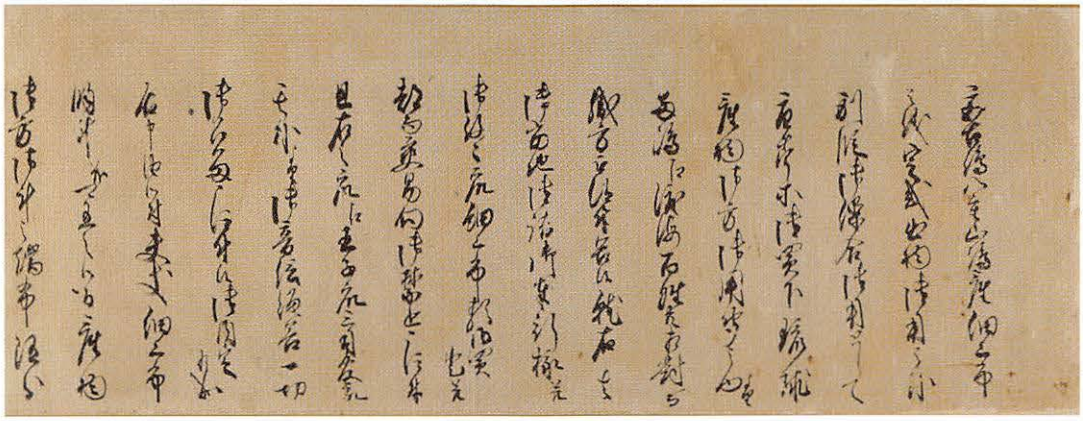
上原村「申年請取帳」

石垣市立八重山博物館蔵

西表島上原村が人頭税を蔵元に納めた時の蔵元側の1872(申)年の収納記録である。収納記録は①「申年諸上納米請取帳」、②「申年々貢部下米請取帳」、③「申年所遣米請取帳」、④「申年三度夫過上米并所遣木分細工手間米請取帳」、⑤「申年弐度夫賃米請取帳」、⑥「申年御用物料并毎年御用白木綿布代所望物代米請取帳」以上六点が合綴りとなっている。請取帳とは蔵元が発行した請取書の原簿となるものと考えられる。(里井洋一)

宮古・八重山上布等の軽減陳情書

宮良殿内文庫



巻子1巻。宮古・八重山から首里王府へ出向いた両島の頭役が、1863年6月に、連名で提出した書状である。1771年の八重山地震津波以降、人口の激減・疫病や麻疹の流行・飢饉の発生などで織女（上布を織る女性）が3分の1に減ったにも関わらず、薩摩の役人や商人が、貢納布以外に自由売買のための上布類の指導や注文をしている。百姓は農業ができず困窮しているので、布の売買を止めるよう、薩摩藩へ陳情して欲しいという内容である。同史料は、玉里島津家史料所収の1862年に出された「宮古島細上布等奨励販売ノ件」の後を受けて出されたものと想定され、幕末の貢納布が、近代以降の自由売買可能な特産品へと移行するまでの過渡期を示す重要な史料といえる。(久貝典子)

3．宮良殿内

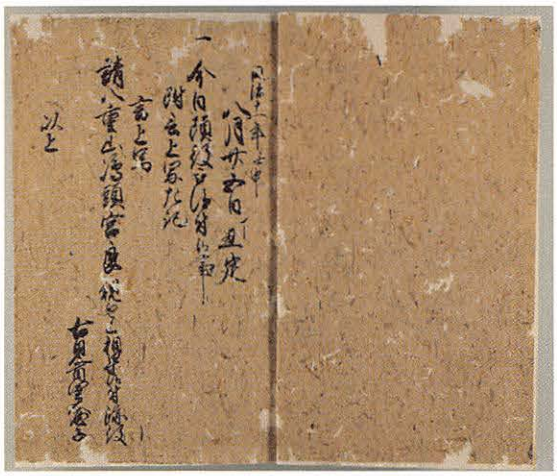
勤書（つとめがき）

宮良殿内文庫

表題に「小宗竹富与人當永以後歴代之／勤書綴／松茂氏第十一世／宮良當整」とあり、本来は四冊あったものを當整の代において合冊製本したものとみられる。勤書とは各人の職歴や功績を時系列に列挙したもので、八重山における勤書は家譜に追記（仕次（しつぎ））する際の基礎資料としての役割を担っていた。本史料は當永からはじまり、當訓までの９名の名前が確認できる。時代としては 17 ～ 19 世紀前半にかけての記録となり、内容には沖縄本島への出張（上国）に関する記録等がある。（冨田千夏）

頭役被仰付候以来日記（かしらやくおおせつけられそうろういらいにっき）

宮良殿内文庫



記主は、松茂氏宮良親雲上當宗。記述は，1872 年～ 1887 年までの 15 年間に及ぶ。八重山島 で最高位の頭役（三人制）に任命された日から書き起こされた公務日記である 。 首里城での任命儀礼や王府役人との関係、地元八重山での公務（例えば、村々・島々を巡察する「親廻り」など）、王府から派遣された在番との関係、など多岐にわたる。 頭役の具体的な公務内容が分かるだけでなく、清明祭の導入など家祭祀に関わる事項も散見される。 また、「琉球処分」（1879 年）前後の政治社会的動向に関わる事項も見られるなど、貴重な史料である。（豊見山和行）

言上写（ごんじょううつし）

宮良殿内文庫

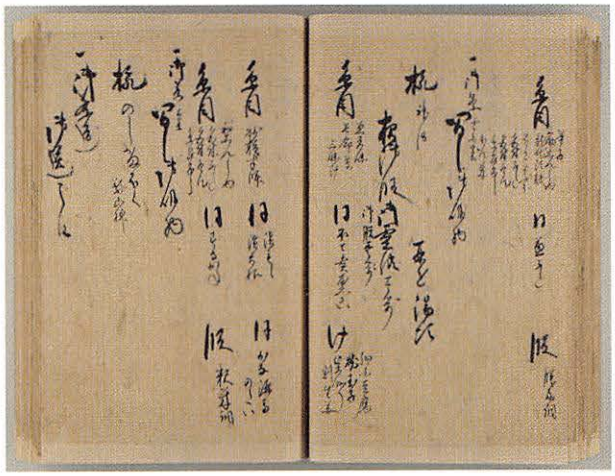
「言上」とは国王へ上申するという意味であり、上申された要請は国王の裁可を受けたあと、「言上写」として当人へ下達される仕組みであった。本資料は故宮良親雲上の後任として古見首里大屋子（こみしゅりおおやこ）の八重山島頭職への任命要請が評定所筆者（ひょうじょうしょひっしゃ）より国王へ言上され、承認された後、首里王府から古見首里大屋子へ渡された「言上写」である。これによって、宮良間切の新頭役が誕生した。内容は、国王への言上がすみ、許可されたため、今日明日中に氏（うじ）と名（な）乗りを提出せよ、となっている。本件の言上にあたる文書の写しが『頭役被仰付候以来日記』に記述されている。（冨田千夏）

諸品買入帳（しょしなかいいれちょう）　宮良殿内文庫

本史料は、日用品購入に関するものである。素麺や石炭など食料品や日用品を購入した際の、代金として支払った米の量が記載されている。内容は「申」「戌」などに区分され記載されている。作成年は1883年。（琉球大学附属図書館）

祭之時膳符日記（まつりのときぜんぷにっき）

宮良殿内文庫

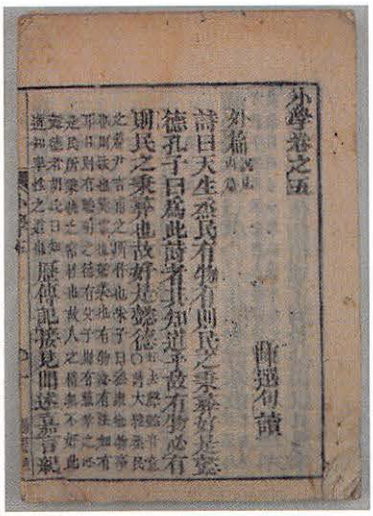


松茂氏宮良親雲上（當宗ヵ）編集。十六日祭、盆祭、彼岸等の仏事に関する家庭祭祀の際の献立構成を記録した資料である。1862～1901年までの約40年間の記録となっており、それぞれの祭毎の献立や料理名、食材等が記録されている。

料理は日本の精進料理の影響がみられるが、中にはジュゴン（海馬）の肉を薄く削った「かな海馬」の酢味噌和えや、「巻みどり（オオタニワタリ）」等使用した食材に八重山の特色が見られる。（冨田千夏）

小学　巻五（しょうがく　まき）

宮良殿内文庫

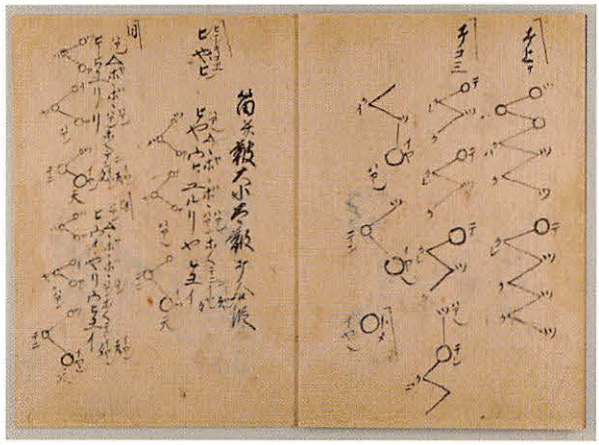


『小学』は、宋代の儒学者朱子（じゅがくしゃ しゅし）が編纂した、人として守るべき道徳的秩序や人間の倫理を説いた修身・作法の書。1187年に成立。王国時代、儒教教育は国家教育として琉球社会全体で普遍的におこなわれていた。『小学』は、首里・那覇・泊の村学校所（むらがっこうじょ）や地方役人（じかたやくにん）を養成するための筆算稽古所（ひっさんけいこじょ）、宮古・八重山の会所（かいしょ）などで、儒教教育のための教材として『三字経（さんじきょう）』『二十四孝（にじゅうしこう）』と共に用いられていた。『小学』（琉球版）は琉球国内で印刷刊行されたもので、初学者のための書として知られている。（赤嶺守）

4．祭祀

笛 并皷大小太鼓打合 段（ふえならびにつづみだいしょうたいこうちあわせのだん）

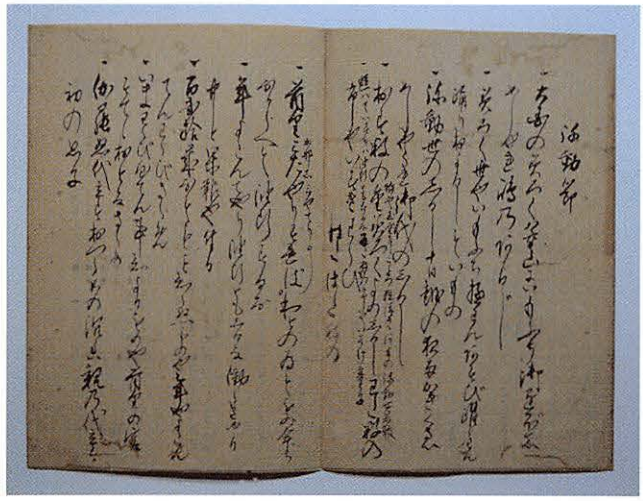
宮良殿内文庫



笛と小皷大皷それに太鼓(能楽でいう四拍子〔しびょうし〕)の楽譜。カタカナはこれらの表す楽譜のようなもので，口唱歌（くちしょうが）という。八重山石垣に現存するウード（大胴）・クード（小胴）という烏帽子直垂（えぼし・ひたたれ）姿で演奏される芸能はこれにつながる大和芸能である。（琉球大学附属図書館）

弥勒節（みろくぶし）

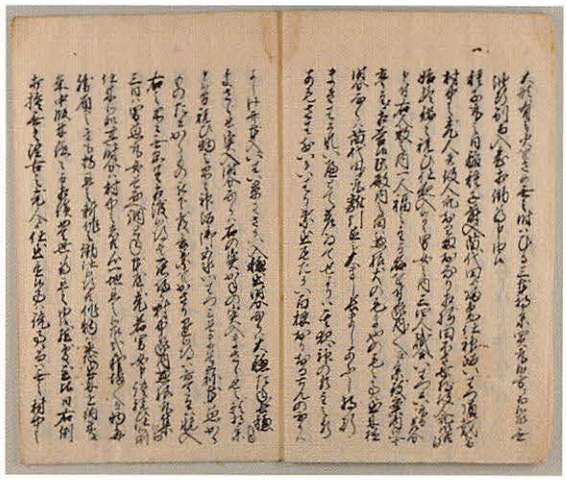
石垣市立八重山博物館蔵



弥勒節の歌詞十節をおさめている。八重山諸島では、豊年祭や結願祭、種子取祭に演じる弥勒行列で演唱される。第一節の歌詞は、「大国のみろく八重山にいもふち　御懸ぼしめしやれ　嶋のあるじ」（歌意：大国の弥勒様が八重山にいらっしゃっておりますから、統治を立派にしてください、島の主様）。第三節には「弥勒世のしるし十日越しの夜雨」という歌詞がある。七福神の布袋に似た面を被った弥勒を、五穀豊穣をもたらす農耕の神と仰ぎ、弥勒の来訪によって島の繁栄が成就すると考えたのである。そして、穀物の稔りや穀物に恵まれた豊かな生活を「弥勒世」「弥勒世果報」などと呼んでいる。（大城學）

慶来慶田城由来記（けらいけだぐすくゆらいき）

宮良殿内文庫



八重山士族・錦芳氏（きんぽううじ）の事跡を，初代の慶来慶田城用緒（西表首里大屋子）から10代目の用州（古見目差）までまとめたもの。初代用緒が，西表外離島を発祥とする由来譚から始まり，代々の人物とその当時のできごとが記述されている。種子取等に代表される農耕祭祀・儀礼についてもえがかれており、八重山における祭祀儀礼を知る資料としても貴重といえる。（琉球大学附属図書館）

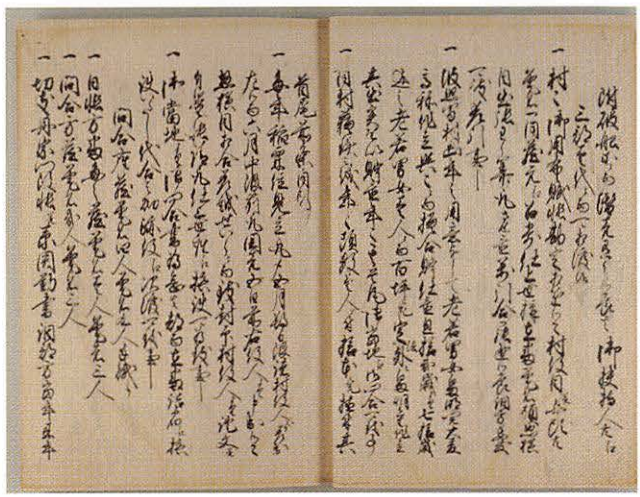
5. 八重山の藁算（わらざん）・サン

沖縄の藁算

沖縄の藁算は、稲藁などの植物を結んで数の記録や計算の道具として用いた沖縄独自の民具である。琉球王国時代から明治の中頃まで、文字を使えなかった農民や庶民を中心に県内各地で使用されていた。素材には、おもに稲藁が多く使われたことから「藁算」と呼ばれているが、ほかにもイグサ、アダンの気根、ビロウ、ソテツ、ススキなどの身近な植物が利用された。また、地域によって用途や形状に違いが見られ、呼称もワラザン、バラザン、パラザン、ワラザイ、ワラサニなど様々なものがある。沖縄の藁算は、失われた日本の結縄文化の一端を知ることのできる重要な民具であるが、明治以降、識字教育の普及に伴って次第に使われなくなり、現在では祭祀に僅かに残るだけとなっている。（佐々木健志）

八重山島蔵元公事帳（やえやまじまくらもとくじちょう）

宮良殿内文庫



1857年11月に八重山島の蔵元の行政規定をまとめた書。宮古・八重山を視察した検使の翁長親方らが作成した。内容は、首里王府の三大儀礼（冬至・正月・小正月）の儀式を蔵元で行う場合の規定、役人の勤務に関する規定、首里王府との連絡に関する規定など多岐にわたる。首里王府がどのように八重山を統治しようとしたのか、また、八重山がどのような社会だったのかがうかがわれる貴重な文書である。貢納布のわら算についての記載もある。本書は写本で、1873年に書き写されたものである。（崎原綾乃）

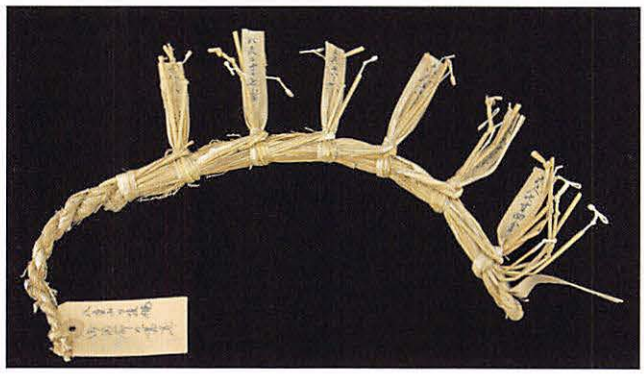
文書綴（ぶんしょつづり）

宮良殿内文庫

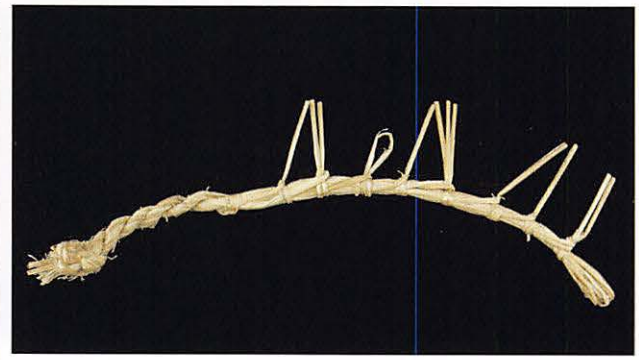
成立年、作者不明。八重山島の蔵元から首里王府の御物奉行所へ提出された文書の控えであろう。内容は、宮良間切の各村に関する報告書である。食糧事情、苧麻（ちょま）畑、糸芭蕉のこと、猪垣のことなど農民の生活の多岐にわたる報告が記されている。夫遣（ぶづかい）という労役に関するわら算の記述もある。（崎原綾乃）

鳩間島の豊年祭で使われる氏子算。島にある五カ所の御嶽を守る各家の人数（島外者も含める）を御嶽ごとに藁で結び、各家の人数に応じて神酒を造るための米を各戸から徴収する。藁算は祈願のあと御嶽に奉納される。

藁算を持つ男（『八重山蔵元絵師画稿集』より八重山島士族平民老若男女世俗之図　部分）
石垣市立八重山博物館 蔵



御用布の藁算（八重山）
王府に税として収める御用布の割り当てを示した藁算



人員検査算
村内での集会に参加する 15 歳以上の人員を記録するのに用いた藁算

沖縄のサン文化

沖縄では、ススキを 1 ～ 数本束ね葉先の部分を片結びにした「サン」や「ゲーン」、「マータ」などと呼ばれる民具が、魔除けや屋敷御願のほか、所有や禁止を表す標として使われてきた。このようなススキの結びは奄美以南の琉球列島に広く存在し、地域によって名称や使用方法などに違いが見られる。一方、同様のススキの草標は、中国南部や台湾、フィリピンなどの少数民族の間でもほぼ同じ意味を持って使用されており、沖縄だけでなく中国南部から東南アジアに至る広い範囲に同様の民俗文化が存在することが明らかになってきた。琉球大学博物館では、ススキの草標の発祥と伝搬等についての研究を進めている。（佐々木健志）

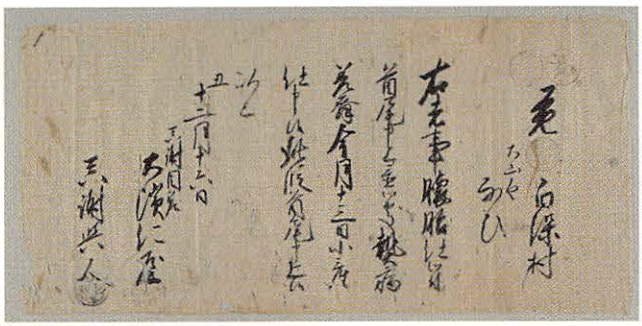
宮古島の畑に立てられたサン（マータ）

八重山のサン

八重山諸島ではおもに「サン」と呼ばれているが、与那国島では「ツッツァー」と称することもある。石垣島の登野城では、子どもが生まれると、稲藁を綯(よ)って３本の片結びにしたものを新生児の枕元において魔除けとする。また、与那国島では風邪などで子どもが体調を崩したとき、アダンの葉を片結びにしたものを、塩を入れた皿と共に子どもの枕元において邪気を払う。（佐々木健志）

稲藁を用いて３本の片結びを造った魔除けの「サン」（石垣市平得）

アダンの葉を裂いて片結びにした魔除けの「ツッツァー」（与那国島）



覚　懐胎届（おぼえかいたいとどけ）　宮良殿内文庫

覚　出生届（おぼえしゅっせいとどけ）　宮良殿内文庫

近世の八重山では、女性の妊娠・流産・出産は届け出が必要であった。「覚　懐胎届」と「覚　出生届」は、その様子を今に伝える資料である。「覚　懐胎届」は、丑年12月16日（年代不明）の文書である。白保村の屋号「大山や」の妊婦「なび」が、熱病にかかって流産したこと、女性「かまど」と「まかなし」の２人が妊娠したことを報告している。「覚　出生届」は、丑年12月18日（年代不明）の文書である。この月の８～13日までの間に白保村で８名（男児３名、女児５名）が生まれたことを報告している。

両方の文書はともに白保村の役人である真謝目差、真謝与人（ゆんちゅ）の名前で八重山蔵元へ出されている。八重山での人口増加を推進している首里王府の人口把握の実態を見ることができる。（崎原綾乃）

きじむん・こがじい のクイズラリー

スタート！

展示物をみながら チャレンジ！

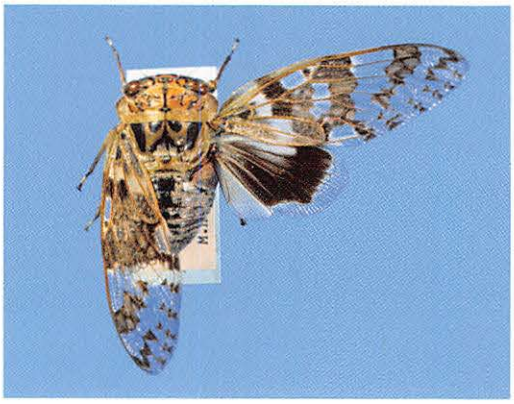
1．八重山島には、生きた化石といわれる世界でも珍しいネコの仲間がいるよ。名前はなあに？

①イリオモテマヤネコ
②イリオモテヤマネコ
③クロネコヤマト

※琉球大学理学部動物生態学研究室撮影

2．石垣島の一部の地域でしか確認されていない、絶滅が心配されているイシガキニイニイはどこに住んでいるのかな？

①於茂登岳
②川平湾
③石垣島米原のヤエヤマヤシ林



3．この絵は、『椿説弓張月』という江戸時代の小説に出てくる人魚です。その肉を食べるととっても長生きできるんだって。ある海の生きものがモデルになっていますが、それは何かな？

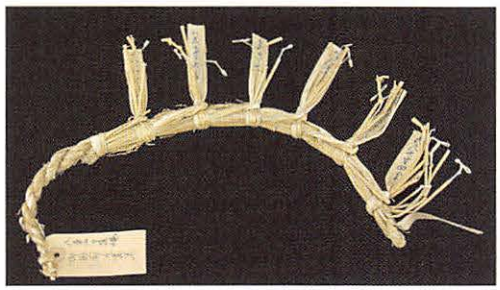
①ジュゴン
②ドラゴン
③カネゴン

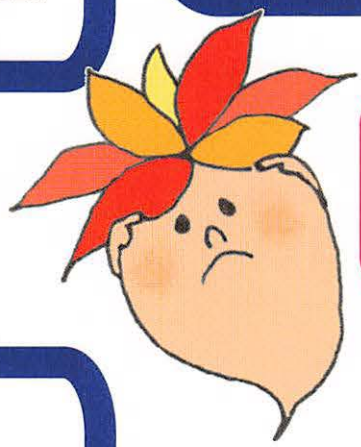
5．ここはどこだろう？　展示写真にヒントがあるよ！

①石垣やいま村
②中村家住宅
③宮良殿内

6・これは、むかしの八重山で文字を知らない人が数を計算するためにつかっていた道具なんだ。名前を次の３つからえらんでね！

①かけ算
②つな算
③わら算

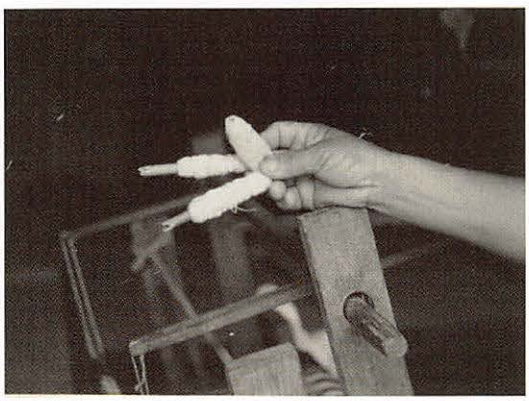




ゴール！

4．これは、織物を作る時の道具なんだ。方言では「フネ」というよ。名前を次の３つからえらんでね！

①サザエ
②糸巻
③ワカメ



スタンプをおしてね！

保護者の方へ：答えはこの冊子のどこかにあります。

平成 29 年度　琉球大学附属図書館・琉球大学博物館（風樹館）企画展
石垣市制施行 70 周年記念企画展
琉球大学資料にみる　八重山の自然とくらし

主催｜琉球大学附属図書館
　　琉球大学博物館 (風樹館)
共催｜石垣市
企画｜琉球大学附属図書館研究開発室
仲座栄三（附属図書館館長）
大城學（法文学部教授）
赤嶺守（法文学部教授）
豊見山和行（法文学部教授）
里井洋一（教育学部教授）
前城淳子（法文学部准教授）
金城ひろみ（法文学部准教授）

琉球大学博物館 (風樹館)
佐々木健志（学芸員）

期間｜平成 29 年 12 月 5 日（火）～ 12 月 17 日（日）

スタッフ
琉球大学附属図書館（情報サービス課沖縄資料担当）
冨田千夏　崎原綾乃　久貝典子　林あんり　山本ちひろ　城間千賀子
琉球大学博物館（風樹館）
佐々木健志　島袋美由紀
協力
石垣市立図書館
石垣市立八重山博物館
琉球大学理学部動物生態学研究室

印刷
株式会社近代美術

発行日：平成 29(2017) 年 11 月 30 日

問い合せ｜琉球大学附属図書館情報サービス課　TEL.098-895-8697
琉球大学附属図書館ホームページ　http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/

※本企画展は「ちゅら島の未来を創る知の津梁（かけ橋）事業」の一環として実施するものです。

文部科学省
地(知)の拠点